

IAUD Newsletter vol.2 第9号 (2009年12月号) 目次

1. 特集 : *towards2010* 「京都から浜松へ : ユニヴァーサルデザインをめぐる考察」
ロジャー・コールマンRCA名誉教授からの寄稿 1
2. [浜松市の取り組み] : 国際UD会議の開催に向けて～おもてなしの心で～ 12
3. Case Study: 移動空間プロジェクト
「シームレスな移動空間の実現」に向けた取り組み 17
4. 世界のUD動向 : 「第4回サステナブルデザイン国際会議 2009 Destination 2023」開催予定
【UD2010 ウォッチング】ほか 24

2010年国際会議に向けた特集として、本誌6月号での米国IHCD所長のヴァレリー・フレッチャー氏に続き、今回は欧州から英国王立芸術大学院 (Royal College of Art: RCA) のヘレン・ハムリン研究所 (Helen Hamlyn Centre: HHC) 共同所長の職を退かれ、現在は同大学院インクルーシヴデザイン名誉教授を務められているロジャー・コールマン氏より寄稿していただきました。コールマン名誉教授はIAUD発足以前からIAUDのメンバーとも深い交流があり、国際会議開催を中心として志を同じくする、重要な海外パートナーのひとりです。欧州ではUDを「インクルーシヴデザイン」あるいは「デザインフォーオール」など異なった呼び方がされるケースが多いのですが、目指す方向や方法論は同じとあってよく、欧州から日本がそしてIAUDがどう見えているのか、また、UDの将来ビジョンや国際会議での課題など、ともに考えていきたいと思っております。

特集 : *towards2010*

「京都から浜松へ : ユニヴァーサルデザインをめぐる考察」

英国ロンドン・王立芸術大学院 (RCA)
インクルーシヴデザイン名誉教授
ロジャー・コールマン



2006年11月に京都で開催された第2回国際ユニヴァーサルデザイン会議の講演集 (参考資料1) の監修にあたった私は、ユニヴァーサルデザインの現状を概観できる、すばらしいポジションに恵まれました。また、私は一年前、ロンドンにある英国王立芸術大学院 (Royal College of Art: RCA) のヘレン・ハムリン研究所 (Helen Hamlyn Centre: HHC) 共同所長の職を退き、同大学院インクルーシヴデザイン名誉教授となりました。自身の職場環境の変化によって、私はこれまで以上に幅広くユニヴァーサルデザインの将来について考え、そして京都で開催されたあの非常に有益な会議以降、私たちが直面している新しい課題や問題についても、自由に思いをめぐらすことができるようになり

ました。私はこの機会を借りて、国際ユニヴァーサルデザイン協議会の会員および支援者の皆さまに私の考えをお伝えしたいと思います。そして、私の考察がより明解な形を取るよう助言をしてくれた人たちと、この記事の執筆に助力を惜しまなかった人たち、すなわちヘレンハムリン研究所リサーチフェローの Rama Gheerawo 氏と Yan Ki Lee 氏、ノルウェーデザイン協議会デザインフォーオール (UD) プログラム主催者の Onny Eikhaug 氏、デザインフォーオール (UD) に関するノルウェーの雑誌『Form & Funktion』編集者の Karin Bendixen 氏、およびケンブリッジ大学工学設計センター (Engineering Design Centre) の John Clarkson 教授に感謝したいと思います。

患者の安全のためのデザイン

RCA の名誉教授になったことで、私はさまざまな校務と後進の育成という職務から解放され、ヘレンハムリン研究所および同研究所のさまざまなプロジェクトに対するアドバイザーとして、引き続き同大学院に勤務することとなりました。現在私は、RCA、インペリアル・カレッジ・ロンドン、およびパディントンにあるセントメアリー病院が共同で実施している3年間の「デザインを通じた医療ミスの防止 (Design Out Medical Error: DOME)」研究プログラムで諮問委員会の委員長を務めています。 (www.domeproject.org.uk) 私は京都の会議で患者の安全の重要性について取り上げ、この分野ではデザインが非常に大きな役割を果たし得ると主張しました。そして、私がそれまでに携わった仕事、すなわち英国保健省のためのスコーピング調査 (参考資料 2, 3) から始まって、医療分野の包装・製品・救急車のデザインなどに関する一連のデザインプロジェクトに至る仕事についても紹介いたしました。これらの仕事の内容については、ヘレンハムリン研究所のウェブサイト (www.hhc.rca.ac.uk/291/all/1/Publications.aspx) で詳しく知ることができます。最近では、院内感染撲滅のためのデザインに関する英国デザイン協議会との共同研究に携わっています

(www.designcouncil.org.uk/Design-Council/Files/Landing-pages/Design-Bugs-Out/)。ヘレンハムリン研究所の Sally Halls 氏および Grace Davey 氏のチームはこれまでにめざましい成果を上げ、日常的に使用する医療機器の安全性を高める6つの革新的デザインを開発しました。具体的には、清掃の容易な血圧計カフ、カニューレ (薬液の注入や体液の排出、気管切開の際の空気の送排などの為に体内に挿入するパイプ状の医療器具) の挿入時間表示器、清掃の容易な病床カーテン用クリップ、防水層が損傷すると色が変わるインテリジェントマットレス、清掃の容易なパルス酸素濃度計、患者用ティッシュディスペンサーがそれです。

(www.hhc.rca.ac.uk/2261-2282/all/1/Designing_Bugs_Out.aspx および www.designcouncil.org.uk/Design-Council/Files/Landing-pages/Design-Bugs-Out/Everyday-equipment/)



マグネット固定式で清掃が容易な血圧計カフ



カニューレ挿入時間表示器



清掃が容易で患者に優しいパルス酸素濃度計



患者が使用する消毒用ティッシュ

DOME プロジェクトは多くの意味で過去の成果の集大成です。これまでの教訓と考察のすべてが、ロンドンの重要な教育病院における毎日の業務の現実に活かされているからです。私は研究チームを組織し、プロジェクト案を作成し、プログラムのために167万ポンドの資金を確保しました。重要なのは、研究チームが何のためのデザイン向上かという根拠の明確化を重視している点で、私はこの点がDOMEプロジェクトの本質的な部分だと思っています。それまでのデザインプロジェクトでは、医療分野における包装、あるいは蘇生ベッドなど、個別のテーマを取り上げ、それぞれのケースにおいて、最初は問題明確化のための証拠収集を行い、次にこれを踏まえて解決案が妥当かどうかの根拠を見出すという形を取っていました。DOMEプロジェクトでは、デザインに関する個別の問題を超えて、システム全体により注目するアプローチが取られています。このアプローチでは、プロセス、人々、機器を病棟の全体性の中で考慮し、とりわけ患者のベッドスペースまわりにおいてプロセス、人々、機器が互いにかかわっているかという相互作用に着目します。個々の製品デザインの革新性がどれほど優れていると、このような全体的なアプローチがなければ、そしてプロセス、人々、機器を包含する幅広いコンテキストの中で問題と解決策とを結び付ける健全な根拠がなければ、患者の安全が向上する保証はありません。私は、ユニヴァーサルデザインについても同じことが言えると思います。

デザインインテグレーション

現実に実践されているユニヴァーサルデザインに関して私が抱いている大きな懸念の一つは、結果としてある種の烙印付け的な側面を---しばしば知らないうちにですが---持っていることであり、身体障害者や要介護者（同種の表現はたくさんありますが、ここではそのうちこの2つを例として引きます）のためのデザインという歴史的出自をいまだ乗り越えていないことです。このようなことを言ったからといって、私は身体障害者や要介護者向け製品のデザインを批判するつもりは毛頭ありません。これらの製品はいずれも長く重要な歴史を持っています。しかし、ユニヴァーサルデザインとインクルーシヴデザインの本質は、機能と解決策とがシームレスに統合されていて、一切の烙印付けなしにあまねく使用でき、アクセスできる場所にあると思うのです。これはデザイナーやメーカーが個々の製品開発において実際に直面する問題であって、本当に効果的な解決策が生み出されるためには、企業がインクルーシヴデザインやユニヴァーサルデザインのアプローチを、企業全体の哲学・実践・消費者製品提供の中核に据える必要があります。OXO社のAlex Lee氏は基調講演の中で、このようなアプローチがいかに同社の社風を貫いているか、いかにGood Gripsシリーズ製品の本質的で統一的な要素になっているかを雄弁に語ってくれています。一方で、Lee氏は次のように付け加えることを忘れませんでした。「ユニヴァーサルデザインが当社にとって“マーケティング”の手段だったことはありません。当社はユニヴァーサルデザインを実践していますが、喧伝はしません」。OXO社のGood Gripsシリーズは、革新性とデザインの追求から生まれた、使いやすい魅力的な製品として販売されています。

英国では、大手通信事業者のブリティッシュテレコム（BT）の例があります。同社はここ数年の間に企業文化を大きく変革し、高齢者や障害者の顧客を専門に担当す小さな部門を持つメインストリームプロバイダーから、製品・サービス開発およびマーケティングと消費者製品提供全体において、インクルーシヴデザインをこれらを推進するための重要な要素として位置付ける企業へと変身しました。Good Gripsシリーズ製品の場合と同様、BT社はユニヴァーサルデザインそのものではなく、使いやすさと結び付いた消費者にとってのメリットという側面を強調していますが、社内的には同社がたどってきた「変革の旅路」を非常に重視しています。その旅路は、「British Standard on Inclusive Design Management (BS7000-6)」（インクルーシヴデザインマネジメントに関する英国標準）に大きく触発されて2005年に始まり、2006年のインクルーシヴデザインツールの開発が重要なマイルストーンになりました。BT社は変革プロセスの一環として社内でこのツールを使用し、最終的には2007年7月に立ち上げたウェブサイトでこのツールをパブリックドメインとして公開しました (www-edc.eng.cam.ac.uk/betterdesign/)。

これらの企業が上げた成果には、多くの点で、私が患者の安全のためのデザインにおいて推進したいと考えているシステムレベルのアプローチが反映されています。システムとプロセスの改

善を通じてより安全な医療サービスを提供するために、プロセス、人々、製品のシームレスな統合が必要であるのと同様に、すべての人にとってアクセス可能な、統一された形での消費者製品提供を実現するために、製品機能と製品レンジのシームレスな統合が必要なのです。そしてそれは、理想的には、すべての人にとっての使いやすさを向上しつつ、特定のユーザーグループのニーズを考慮した付加機能や付属品をも備えたコア製品を通じて行われるべきものです。このことは、製品レンジや統一された消費者製品提供の例で考えるとわかりにくいかもしれませんが、公共施設や公共サービスに適用してみるとはるかに理解しやすくなります。実際、Patricia Moore 氏、定村俊満氏、および Roger Whitehouse 氏の基調講演に、3つのすばらしい例を見出すことができます。いずれの例でも、あらゆる要素がシームレスかつ優美に統合されており、すべての利用者を暖かく受け入れ、迎えてくれる雰囲気を持つ公共輸送システムや建物が実現されています。それぞれの例の中核にあるのは、重要なユーザーグループ（高齢者、車椅子利用者、視覚障害者）への対応を明確に意識し、これを重視する姿勢であり、その結果としてのデザインが、これらの「非常に重要な」ユーザーグループにとってきわめて良好に機能し、そのことがさらに広く大多数のユーザーにとっての利用のしやすさにつながっています。



京都では取り上げられませんが、本当の意味でアクセスしやすい都市・近郊インフラの開発に真剣に取り組んでいるさまざまな都市の例も引き合いに出すことができます。このようなインフラの実例として、KHRAS Architects が駅を設計し、Giugiaro Design が車両を設計したコペンハーゲン地下鉄、Norman Foster の設計になるコペンハーゲン動物園のゾウ舎などがあります。

こうした事例を見ると、デザインが統一的・統合的な要素として機能していることがわかります。優美で革新的なうえに、よく考えられ、研究されたデザイン上の数々の特徴が、全体的なソリューションとしてまとめられていることで、クオリティが一段階アップしていることがはっきりと見てとれるのです。実際、デザイナーや研究者たちが「グッドデザイン」「ベターデザイン」「レスポンシブルデザイン」について語っているのを聞くと頼もしい限りです。私は、ユニヴァーサルデザインがその本来の軌道に乗り、過去を乗り越え、現実に変える力となるためには、こうした「グッドデザイン」「ベターデザイン」「レスポンシブルデザイン」といった言葉で表現されるデザインの特徴をさらに前面に押し出す必要があると考えています。



コペンハーゲン地下鉄インテリア
写真 2 点とも © Karin Bendixen / Form & Funktion

最近読んだ本

ここ数か月間の私の読書生活の伴いになったのは、上のことをそれぞれに異なる方法で主張した 2 冊の本です。私は 2 冊の本をゆっくりと読み、一方の本を少し読んでもう一方の本を手を取りながら、何度も読み直しました。1 冊はずいぶん前に出た古典的な著作で、Victor Papanek の『Design for the Real World (実世界のためのデザイン)』(参考資料 4)、もう 1 冊は Graham Pullin の『Design meets Disability (デザインと障害との出会い)』(参考資料 5) です。Papanek は非常に強い信念と主張を持っていたために、当時のデザインのエスタブリッシュメントからはあまり好意を持たれず、失意のうちに後半生を送りました。私はアムステルダムで Papanek と話をし、その後 1997 年にロンドンで夕食のテーブルを囲みながら、デザインと人類が直面してい

るさまざまな課題について話し合ったときのことをよく覚えています。私は Papanek が、今デザインの世界で起こっている変化を目にすることなく、また、「シグネチャー」デザインよりもこの惑星の未来により関心を抱いて懸念する若い世代が、自分のアイデアをよく理解してくれていることを喜ぶことなく世を去ったことを残念に思います。Papanek は『Design for the Real World』の中で、大量消費 (consumerism) を激しく非難し、大量消費に迎合するデザイナーを攻撃しました。Papanek のこうした攻撃の大部分は、70 年代初頭以降に生じた大きな変化を考えると、もはや古く、ある意味で疑問に思える点もあるかもしれませんが、『Design for the Real World』という本の中心にあるのは、現実のニーズ、とりわけ恵まれない人々のニーズに役立つデザインが大切であるという強烈な主張です。『Design for the Real World』の中で Papanek が提唱しているレスポンシブルデザインというアイデアは、Roger Whitehouse 氏がその基調講演で取り上げ、これを実現するためのプログラムの重要性を訴えています。こうしたプログラムは、京都の会議において参加者たちが共同で表明した目標とも合致するものです。

Graham Pullin は、高いデザイン性と障害を 2 つの出発点として、この 2 つが出会った場合に生まれる可能性について想像しています。Pullin の思考の原動力になっている問題意識は 2 つあります。一つは、メガネでは成功しているデザインの感性がなぜ補聴器やその他の介護製品に適用されないのかという疑問です。メガネは「持っているべき」ファッションアクセサリになり、それが新しいマーケットの開拓につながって技術開発への資金の流入を促し、非常に多くの人々に優れた視力を提供することが可能になっています。もう一つは、現在主流となっているデザインは、障害を持つ人々から多くのことを学べるという信念です。Pullin は障害について、革新をもたらす大きな力と認識し、デザインに対するブレーキではなく、逆に豊かな発想を促す可能性を持つものと位置付けています。Pullin は、現実の出会い (real)、想像上の出会い (fictional)、分析的な出会い (analytic) の 3 つの出会いを通じて、このような可能性を探っています。具体的には本の中で、「when the Eameses met leg splints (イームズが足の添え木に出会ったとき) (現実の出会い)」、「when universal meets simple (ユニヴァーサルがシンプルに出会うとき) (分析的な出会い)」、そして「if Philippe Starke met bottom wipers (フィリップ・スタルクが“お尻拭い”に出会ったら) (想像上の出会い) と題されている部分がそれです。Pullin が主張しているのは、Victor Papanek が指摘した課題に対し、高邁で高いデザイン性を持った考え方を適用することであり、その際に、障害を持つ人々を共同デザイナーとして、また現実の暮らしの中でさまざまな課題を抱えつつ生き、そうした課題と共に生きるための革新を生み出し得るエキスパートとして取り込むことなのです。ヘレン・ハムリン研究所で採用されているアプローチも、これにかなり近いものです。同研究所の「インクルーシヴデザインチャレンジ」(いわゆるデザインマラソン) では、若いデザイナーたちが障害を持つユーザーとペアを組んでいますし、「リサーチアソシエーツプログラム」では、主要企業や慈善団体と共同で、現実の暮らしの中で遭遇するさまざまな課題に対して高邁な思想を適用しています。「インクルーシヴデザインチャレンジ」はモデルとして世界各地で採用されており、京都の会議でもさまざまな基調講演で取り上げられています。繰り返しになりますが、Victor Papanek が京都の会議に出席できなかったことは非常に残念です。私たちにできることは、Graham 同様、もし Papanek が同席していたら、と想像することだけです。なお、国際ユニヴァーサルデザイン協議会が浜松で開催する次の会議に参加されるすべての方に、上に挙げた 2 冊の本をぜひ読むようお勧めしたいと思います。どちらも私たちにとって大いに刺激になり、ユニヴァーサルデザインを 21 世紀を特徴づける大きな力にしようという気持ちにさせてくれます。

国を越えた協力

北欧諸国、すなわちデンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランドでは、実際に国を越えた協力が現実になっているのを目にすることができます。これらの国々では、福祉、デザイン、および研究の分野において、ますます国際協力が盛んになりつつあります。これはある意味で驚くにはあたりません。なぜならこれらの国々では社会福祉のモデルが互いにきわめて似通っているうえに、機能的デザインの伝統がもともと色濃い地域だからです。これら 2 つの傾向が合

流したのが 1968 年夏、ストックホルムの Konstfack スウェーデン国立美術工芸大学で Victor Papanek が講演を行ったときで、車椅子に座った人を表す国際シンボルマークが生まれたのもこのときのことでした(参考資料 6)。しかし興味深いのは、これらの地域の人々の政治的な組織作りの方法であり、国内のみならず地域全体を通じて、デザイン、教育、政治の発展の間に強いつながりが認められることです。Lars Lindberg 氏は、『北欧における UD (UD in Northern Europe)』と題した基調講演の中で、この点について主に立法府と政府の取り組みの面から述べています。一方、Ergonomidesign 社の Dag Klingstedt 氏は、『生活用品のユニヴァーサルデザイン (UD for Daily Commodities)』と題した基調講演の中で、同じ点についてデザインの面からアプローチしています。Klingstedt 氏は、Ergonomi 社におけるデザインの進化について詳しく取り上げ、介護製品を開発するために Maria Benktzon 氏と Sven-Eric Juhlin 氏が初めて利用したユーザー調査の方法が、後に一般化されて、手工具やベビーカーなどの主力製品にも使われるようになったと述べています。

ところで、実はこの 2 つの基調講演を結ぶ大きな枠組みが存在しています。それは、デザインと教育を通じてインクルーシブな社会を構築することを重視する「障害に関する北欧理事会 (Nordic Council on Disability)」や「北欧福祉センター (Nordic Welfare Centre)」など、国境を越えた取り組みによって実現された進歩の一つです。「新しい旅 (The Modern Journey)」、「すべての人のための観光 (Tourism for All)」、および「すべての人のための都市計画 (City Planning for All)」をテーマとした数々の取り組みは、すでに触れたコペンハーゲン地下鉄やゾウ舎のような模範的な例に直接結実しており、これらに加えて企業に対しても、ユニヴァーサルデザインによって企業の社会的責任 (CSR) を果たせるだけでなく、ユニヴァーサルデザインを通じて新たな事業開発や技術革新が生まれる可能性があるのだという認識を高めるのに役立っています。おそらくこうした取り組みの中で最も重要なのは、地域全体を通じて知識の共有と移転が可能になり、そのことによって、Ergonomidesign 社がパイオニアとなった製品技術革新のプロセスやユーザー調査のプロセスなど、個々の国で開発された技術や技能が地域全体に普及することでしょう。このことは北欧諸国における「デザインフォーオール」運動にさらに勢いを与えており、その成果は北欧のデザインフォーオールに関する雑誌「Form & Funktion」にこれまでも数多く掲載され、公開されています。こうした国境を越えた協力から見えてくるのは、すべての人々に対し、そのライフスパンの全体を通じてメリットをもたらすようなクオリティの高いデザインの普及と繁栄が現実のものになっているということです。これは、個別の解決策を重視し、高額でしばしばデザイン性に乏しいおざなりの介護製品を作ることによしとする姿勢(ほかの地域では残念ながらこうした介護製品がいまだに標準とされています)とはまったく異なるものです。

知識の移転

私たちの活動にとって調査研究が基盤であるのと同じように、「知識の移転」がここで重要課題となります。なぜ良いデザインが必要かという根拠が重要であることについてはすでに述べましたが、この点は、デザインによる解決策の価値と有効性を担保するためだけでなく、産業界から協力を得るためにもきわめて重要であると私は思います。英国では、私たちは工学・物理科学研究会議 (Engineering and Physical Sciences Research Council: EPSRC) を通じて研究資金の支援を受けており、この支援がはずみとなって「British Standard on Inclusive Design Management」(インクルーシブデザインマネジメントに関する英国標準)の策定につながり、これがさらに産業界との数多くの協力を生んでいます。こうした協力のうち最もめざましい成果を上げているのが、BT 社の変革プログラムです。John Clarkson 教授はこうした背景の一部について、「Countering Design Exclusion (デザイン排除に対抗する)」および「The practicalities of Inclusive Design (インクルーシブデザインの実用性)」と題した 2 つの基調講演で取り上げており、同教授と私は英国において、特別号の形を取ったいわば「インクルーシブデザインジャーナル」誌の発刊へ向けて、引き続き作業を進めています。発刊といっても、タイトルになっている分野における専門雑誌を発行しようというわけではありません。Clarkson 教授と私は、それでは

ユニヴァーサルデザインの統合ではなく、むしろユニヴァーサルデザインの分離を目指すことになり、非生産的だと考えています。私たちが企画しているのは、すでに定評ある主力雑誌でインクルーシヴデザインの特集号を組むことであり、今後はこのような取り組みを重ねつつ、さらに広げていきたいと思っています。

浜松での会議開催までに、「Journal of Engineering Design (工学設計ジャーナル)」誌が 2 つの特集号を、「Applied Ergonomics (応用エルゴノミクス)」誌が 1 つの特集号を発行しているはずですが。ヘレンハムリン研究所の「インクルーシヴデザインチャレンジ」、産業界との連携を目的とした同研究所の「リサーチアソシエーツプログラム」、Clarkson 教授率いるケンブリッジ大学工学設計センターの PhD プログラムと共同で進めているこの取り組みによって、私たちは新しい世代のデザイナーと研究者たちが大いに刺激を受けるとともに、研究・教育界から産業界への継続的な知識の移転が確実に行われるようになることを願っています。ユニヴァーサルデザインが今後成功を収めるためには、このようにして次世代に照準を合わせることが不可欠であり、技術開発とその成果としての製品・サービスの技術革新がますます加速化していることから、そうした次世代への着目は重要であるというのが私の個人的信念です。実際、これまでの私たちの作業の多くを左右してきたのは、すでに存在するデザインされた世界の不適切性であり、主力製品・サービスと、寿命の延びつつある人口全体との間の「適合 (フィット)」の欠如でした。

過去の繰り返し

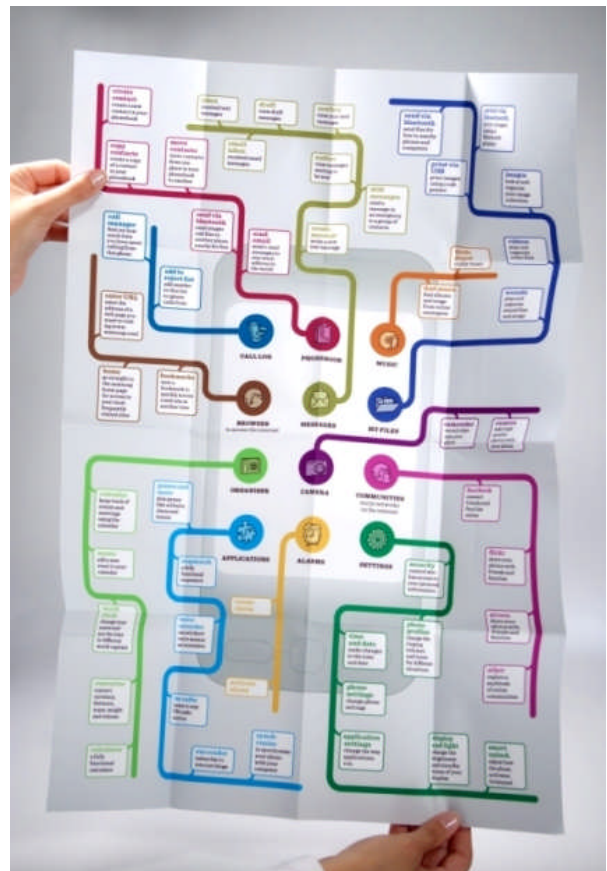
グローバル化が進む消費社会にあって、過去の過ちを修正するために多くの労力が費やされるのは皮肉なことです。私たちは Clarkson 教授が基調講演で指摘した「デザイン排除」の影響をますます受けやすくなっています。それが特に顕著なのは、コミュニケーションとニューメディアの分野です。企業は若者をターゲットに据え、高齢者や障害者のニーズをほとんど、あるいはまったく無視しており、この分野では技術を存分に活用することでデザイン排除に対抗できるだけでなく、ユニヴァーサルアクセスが可能な新時代の到来を告げることもできるはずなのに、まさにその分野において、私たちはますますデザイン排除に直面しつつあります。バリアフリーデザインは、長い年月をかけて、すでに構築された環境から多くのデザイン排除を取り除いてきましたし、これまでに挙げたさまざまな例からわかるように、私たちはユニヴァーサルデザインの原則に基づいて作られた未来について、非常に明確で明るいビジョンを持つことができます。Web Accessibility Consortium (W3C) はインターネットに関して同様の成果を達成していますし、多くの国における障害者/アクセシビリティ関連法の制定はこうした成果を実地に採り入れ、その効果はとりわけ公共サービスと消費者サービスに波及しています。

しかしながら、その一方で製品デザインにおける進歩は遅々として進みません。これは一面では製品デザインが規制や立法措置の対象となじまないからであり、また一面では、各種国際標準が法律よりも遅れているからであり、さらに一面では、新製品開発と投入のペースが加速化していて、製品開発プロセスに対する時間とコストのプレッシャーが高まっているために、ユーザーによるテストや評価がその犠牲になっているからです。たとえばクルマや耐久消費財の分野では漸進的な進歩を認めることができるものの、中小企業が主体の部門では同じ過ちが相変わらず繰り返されています。私たちは現在、各種ツールやユーザー調査のテクニック、能力データに関する知識ベースを構築しており、大手企業によるこの知識ベースの採用は徐々に進んでいます (Clarkson 教授が基調講演で解説しているこの知識ベースは、2010 年に「Applied Ergonomics」誌の特集号に掲載される予定です)。その一方で、パーソナルコミュニケーション製品の進歩は速く、この分野は特に、あらかじめ製品に組み込まれた形でのデザイン排除の影響を受けやすくなっています。こうした製品に最初に飛び付くのは、主に若者であり、ほかの人たちより能力に恵まれているユーザーであることが多いだけになおさらです。Nokia 社はユニヴァーサルデザインアプローチの採用に真剣に取り組んでおり、ヘレンハムリン研究所とも一連のプロジェクトやワークショップで密接に協力しています。しかし、この分野において決定的に必要なのは、消費者へのアピール度を損なうことなく、ユニヴァーサルデザインを目指す技術革新の推進力となるような、数多くの発想豊かなデザインの実例です。

ヘレンハムリン研究所はここ数年、「リサーチアソシエーツプログラム」を通じてこうした課題に取り組んでいます。デザイン、研究、産業界との1年間の協力の試みということもあり、成果物としてのデザインの多くはまだコンセプト段階にとどまっていますが、これらのデザインは企業にとって、将来を見据え、物事を不可能（ディスエーブル）にするのではなく可能（イネーブル）にするような技術の応用方法を模索するのに役立っています（参考資料7）。これらのデザインの例は今ではかなりの数にのぼっており、そのすべてはヘレンハムリン研究所のウェブサイトからアクセスすることができます。これらのデザインのコレクションには学生によるプロジェクトの成果も含まれているため、品質にはばらつきがありますが、コレクション全体は現在では価値ある資料となっており、個々のプロジェクトについては、ヘレンハムリン研究所で「リサーチアソシエーツプログラム」を率いている王立芸術大学院リサーチフェローのRama Gheerawo氏に問い合わせることで、詳しく知ることができます。ここでは、2008/9年の4つのプロジェクトを取り上げましょう。このうち2つは、Blackberry社とSamsung社がパートナーとなっており、年齢ないし障害によって排除されているユーザーを対象にしたものです。2つのプロジェクトのアイデアの要点は次のとおりです。1つは、マニュアルをきちんと作り、デジタルデバイス間にアナログの橋を架けること、もう1つは、「アイズフリー（eyes-free）」操作がすべての人にとってメリットをもたらし、「ハンズフリー」操作を補うものになりうるということです。残り2つのプロジェクトでは持続可能な（環境および社会）技術を取り上げ、電気自動車とインドの地方をテーマに取り上げています。一方のプロジェクトでは、デジタル技術はクルマとドライバーの結び付きをさらに改善できるのか、そしてそれは都市環境にもメリットになるのかということ、もう一方のプロジェクトでは、エネルギーへのアクセスは人々を貧困から脱出させることができるが、ではインド政府がすべての家庭に電気を供給した場合、どのように使われるのが最も望ましいのか、ということの問題意識に掲げています。これらのプロジェクトについてはwww.hhc.rca.ac.uk/1652/all/1/inclusive_design.aspxで参照できます。過去のすべての関連プロジェクトについては、この記事の最後の参考資料の部分にリストアップしました。



写真上：マニュアルと本体を一体化し機能や操作を説明
写真下：インストラクション・ショートカット・カード



全インタフェース/機能のマップ

浜松に寄せる期待

概要を述べるための短い記事の範囲では、上に触れてきたさまざまなテーマについてこれ以上掘り下げて述べることは困難ですが、次回の会議となる「第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2010 in はままつ」を念頭に置いて私たちが考えるべきことの枠組みを提供するという意味では、いずれも重要なテーマばかりだと私は思っています。私がこの記事で試みたのは、浜松での会議の前、会議中、そして会議の後に議論をし、考察するべきだと自分が考えているいくつかのテーマを提示することです。ユニヴァーサルデザイン運動の大きな課題は、こうした問題に対する対応策を取り込み、ユニヴァーサルデザインを「グッドデザイン」の不可欠な要素として「ノーマライズ」していくための効果的な方法を見出すことです。私たちは、Victor Papanek が自己中心的なデザインを批判したときに取った立場を堅持する必要があります。また、Graham Pullin の主張にも耳を傾け、先進的なデザインの最良のものが持ちうる力と創意工夫を大いに活用する必要があります。そして私たちは何よりも、良きにつけ悪きにつけ、その大部分がデザインによって作られた作為的で「不自然な」世界に自分たちは生きているのだということを忘れないようにしなければなりません。私たちは、今や職場での喫煙が多く、多くの国においてそうなるように、デザイン排除に対してノーを突き付けられるよう、世論を動かすことに力を注ぐ必要があります。

日本の文化に関して私が非常にすばらしいと思っていることの一つは（実は初めて京都を訪れた時にすでにはっきりとそのことを意識したのですが）、一見ちぐはぐに見える物事をまとめて捉え、それらの間の緊張感や互いに惹き合う様子を味わう感覚を持ち合わせている点です。たとえば碁盤の上に置かれた2つの石がそうですし、建物の内側と外側もそうです。それがどのように周囲に溶け合っているかを味わうことができ、さらには芸術性の非常に高い工芸品と家庭で使う地味な品とに等しく価値を認めることができるのです。私には、西洋的な見方は対象を孤立させて捉える還元主義的なもので、物事を分離して把握する傾向があるのに対し、東洋的な見方はより融合的、全体的であるように思われます。この違いはユニヴァーサルデザインにとっても大きな影響があります。西洋的な見方でユニヴァーサルデザインに接すると、さまざまな問題、課題、あるいは要因をそれぞれ個別に取り上げる傾向が強くなることとなります。したがって、年齢と障害についても、「障害を持った人々」のように考えて、個人に悪影響を及ぼすものとして捉えることとなります。そのような考え方では、年齢や障害を---ライフスパン全体を通じて---連続するものの一部と見なし、若さや能力とも共存しうる、社会集団の豊かな側面として捉える視点が欠けることになってしまいます。この短い記事の中で私が強調したかったのは、個別のユニヴァーサルデザイン製品やサービスの視点ではなく、ユニヴァーサルデザイン社会という視点で考えることの必要性、分離ではなく統合というレベルで考えることの必要性です。そして、私がこれまでに触れたすべてのテーマ、すなわちヘルスケアにおけるエヴィデンスに基づくデザイン、デザインインテグレーション、インフラと公共輸送、「高邁な」デザインとユニヴァーサルデザインの統合、国境を越えた協力、研究と知識の移転、および過去の過ちから学ぶことは、いずれもそうした必要性のさまざまな側面を表すものなのです。

以上、私の考えを述べさせていただきました。浜松で皆さまにお会いできるのを楽しみにしております。

参考資料：

1. Coleman R. (editor in chief 2009) A Collection of Keynote Addresses: proceedings of the 2nd International Conference on Universal Design in Kyoto 2006, IAUD, Japan. (『「第2回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2006in 京都」講演集』)
2. Clarkson P, Buckle P, Coleman R, Stubbs D, Ward J, Jarret J, Lane R & Bound J. (2003) Design for patient safety: a system-wide design-led approach to tackling patient safety in the NHS, Department of Health Publications, London, ISBN 1-84182-765-7

3. Clarkson P, Buckle P, Coleman R, Stubbs D, Ward J, Jarret J, Lane R & Bound J. (2004) Design for patient safety: a scoping study to identify how the effective use of design could help to reduce medical accidents, Engineering Design Centre, University of Cambridge, UK, ISBN 0-9545243-0-62
4. Papanek V. (1971) Design for the Real World, Paladin, UK 1974 edition (邦訳:『生きのびるためのデザイン』、ヴィクター・パパネック著、阿部公正訳、晶文社刊、1974年)
5. Pullin G. (2009) Design meets Disability, MIT Press, London.
6. Jan Michl. "[Book review of] Widengren, Gunilla, ed. Tanken och handen: Konstfack 150 år [The Idea and the Hand: University College of Arts, Crafts, Design and Art Education in Stockholm is 150 years]. Stockholm: Page One Publishing 1994." Scandinavian Journal of Design History, vol. 7 : 149-154, 1997
7. Gheerawo, R & Lee Yan Ki. (2009) Enabling People: creating inclusive human-computer interactions, proceedings UACHI 2009, Springer.

過去の繰り返し - ウェブリンクとプロジェクトの簡単な説明

http://www.hhc.rca.ac.uk/976-1327/all/1/Communication_in_transition.aspx

高齢者を対象とした Nokia 社とのプロジェクト。アイデアの要点:ティーンエイジャーだけでなく高齢者も生活環境の激変を経験する。

http://www.hhc.rca.ac.uk/976-1334/all/1/The_sound_of_North.aspx

視覚障害者の道案内に技術を応用。新しい動画は <http://www.vimeo.com/4783510> で参照可能。

http://www.hhc.rca.ac.uk/976-1341/all/1/Seamless_mobility.aspx

BlackBerry 社のための7つの新しいサービスに関するデザインコンセプト。アイデアの要点:技術を賢く使うことで仕事と生活をシームレスに融合することが可能にする方法。

http://www.hhc.rca.ac.uk/1788-1831/all/1/TwoTone_Phone.aspx#

BT 社のボタンの大きな電話の発展型。アイデアの要点:デジタル時代において最も排除されている人々(すなわち70代以上の人々)にブロードバンドのメリットを享受してもらう方法。

<http://www.hhc.rca.ac.uk/archive/hhrc/programmes/ra/2006/p4.html>

BlackBerry 社のもう1つのプロジェクト。(技術に合わせて家族のコミュニケーション方法を変えるのではなく、逆に)技術を家族のコミュニケーション手段として利用する方法を提案。

<http://www.hhc.rca.ac.uk/archive/hhrc/programmes/ra/2005/pX4.html>

溢れかえる技術とクルマのダッシュボードの構成とのバランスを取る方法。

<http://www.hhc.rca.ac.uk/archive/hhrc/programmes/ra/2005/pX1.html>

公共スペースでのふれあい促進に照明技術を使う方法。

<http://www.hhc.rca.ac.uk/archive/hhrc/programmes/ra/2005/pX3.html>

家の中のデジタルオブジェ。

<http://www.hhc.rca.ac.uk/archive/hhrc/programmes/ra/2004/ra04p2.html>

Orange 社のためにユーザー中心の種々の医療シチュエーションを想定。

<http://www.hhc.rca.ac.uk/archive/hhrc/programmes/ra/2004/ra04p9.html>

ドライバー不要の低公害車を技術によって実現。

<http://www.hhc.rca.ac.uk/archive/hhrc/programmes/ra/2003/jac.html>

視覚障害と記憶に焦点を当てた Hewlett Packard 社との実験的プロジェクト。

<http://www.hhc.rca.ac.uk/archive/hhrc/programmes/ra/2002/ednrich2.html>

センサー技術の新しい利用法に着目した Omron 社のプロジェクト。

<http://www.hhc.rca.ac.uk/archive/hhrc/programmes/ra/2001/nick.html>

センサー技術を使って人の移動を容易にする Omron 社のプロジェクト。

<http://www.hhc.rca.ac.uk/archive/hhrc/programmes/ra/2000/bryn.html>

家電のデザインとインタフェースを改善するための Dyson 社との共同プロジェクト。

国際UD会議の開催に向けて ～おもてなしの心で～

浜松市企画部ユニバーサル社会・男女共同参画推進課
松尾 伸司



■ はじめに

「やらまいか（やってみよう）」という浜松地域の方言で表されるように、浜松人は、ノリが良く、よそから来た人を受け入れる雰囲気と旺盛なチャレンジ精神があります。こういう気質もあってか、浜松市は、全国の市町村に先駆けてユニバーサルデザイン政策を実施してまいりまして、来年は、着手から満10年を迎える節目の年になります。こうした折に、「第3回国際ユニバーサルデザイン会議2010 in はままつ（以下「国際会議」）」が、本市において開催できますことは大変うれしく、また意義深いものを感じます。この国際会議を通じて、ものづくりのメッカである本市の企業や技術者・研究者等との技術や人の交流が大いに期待されるとともに、多くのお客様をお迎えすることが楽しみであります。浜松に来てよかったと感じていただくとともに、国際会議の成功に向けて、おもてなしの心と本市が取り組んでいる事業の一端をご紹介します。

■ 国際会議プレイベント

国際会議のプレイベントを、下記のとおり本市の中心市街地にある静岡文化芸術大学において開催します。テーマは、「気づき→考え→行動する！～個性を認め新しい形をデザイン、そして暮らしやすい社会の実現へ～」とし、本市がユニバーサルデザイン政策に着手して10年目を迎えた今、もう一度原点である「気づき」から見つめ直し、人と人をつなぐ心のUD＝絆力で、暮らしやすい社会の実現を探る試みに、IAUDのご協力を得てチャレンジしました。

以下、その事業の概要を紹介します。なお、詳細は、専用ホームページをご参照ください。

☆ 専用ホームページ

URL : <http://www.ud-kizuna.jp>

☆ 日時

平成21年12月4日(金)・5日(土)
11:00～17:30 (両日とも)

☆ 会場

静岡文化芸術大学
(浜松市中区中央二丁目1-1)

☆ 主催

UDフォーラム実行委員会、
浜松市、静岡県、静岡文化芸術大学

☆ 共催

国際ユニヴァーサルデザイン協議会



□ 記念講演「誰もが暮らしやすい高齢社会への提言」

樋口恵子氏(評論家)から、進展する少子高齢社会に向け、自立の必要性や社会の仕組みづくりについて、助言をいただきます。

□ パネルトーク「次の世代に今できること」

UD研究の第一人者である古瀬敏氏(静岡文化芸術大学教授)のコーディネートにより、持続可能な未来のために、いま我々に求められていることを、パネラーとともに語り合います。

□ 特別講演「ユニバーサルデザインの来し方、行く末」

米国スティーブ・デモス氏(ヒューマンセンタードデザイン研究所所属)が、これまで歩んできたUDの道程を振り返るとともに、これからのUDの可能性をイメージします。

□ IAUD事業(UD研究発表&特別ワークショップ)

IAUD研究開発企画部会の成果発表と地元ユーザーとの対話型ワークショップ(48時間デザインマラソン)が、IAUDとの共催事業により行われます。

□ UD学習発表とUD大賞授賞式

地元小学校の児童によるUD学習の研究発表とUDの推進活動を行う企業・団体を表彰する静岡県UD大賞の受賞者の表彰と作品発表を行います。

□ UDコンサート等

音楽のまち浜松を中心に活動するジャズバンドと障がいを持つ生徒たちとのセッションや浜松出身のアーティストによる、温かくロマンチックなライブをお届けします。

そのほか、市民団体によるパフォーマンス、UD探索ラリーの催しなど盛りだくさんです。

□ 企業展示、製品展示、自助具展示、学校展示

IAUD会員企業や地元企業・団体等の展示、地元大学の学生が制作した自助具展示、地元小学校の児童がUD学習の研究展示を行います。

■ 国際会議の会場及び周辺施設のUD化整備

もてなしのまちづくりには、心とともにハード面からの取り組みも重要であると考えます。修景施設整備をはじめユニバーサルデザインに配慮した設備等の充実を精力的に図り、来年の国際会議の開催までに、次に掲げる工事を中心に並行して整備を進めてまいります。

□ アクトシティ浜松のUD化整備

国際会議の会場となる「アクトシティ浜松」は、浜松のランドマークとして1994年に完成した産業・文化の交流拠点です。15年を経過する中でバリアフリー化を進めてきましたが、国際会議の開催を契機として、「浜松市公共建築物ユニバーサルデザイン指針」に基づき、思いやり駐車場、多目的トイレ、授乳室の整備や各種サインの見直しなど、ユニバーサルデザイン化整備を急ピッチで進めております。



□ まちなか歩行空間のUD化整備

劣化、破損等がみられる視覚障害者誘導用ブロックの改修と、横断歩道箇所における歩車道の段差を解消する本市が独自に開発した縁石（通称：UDブロック）を敷設する工事を行います。なお、このUDブロックの導入には、視覚障がい者、車いす利用者、身体障がい者等の市民協働によるUD検証によって考案し、実施に至った経緯があります。



□ 路面誘導サインの設置

子供や高齢者、車いす利用者等の視認性の向上と観光客などの来街者の回遊性を高めるため、歩道路面に現在地・方角・目的地等の情報を付したリング状のオシャレな案内サインを、浜松駅から浜松城や公共・文化施設等への主要経路に整備します。このデザインは、市民提案の「もてなしのまちづくり事業」として公募し、最優秀賞に選ばれた作品です。



□ 音声案内サインの設置

視覚障がい者はもとより高齢者を含むすべての人が利用できる音声案内装置を主要経路に設置します。この装置の特徴としては、カード型発信機を持った方が近づくと自動的に音声案内するとともに、周辺案内図に盛り上げ点字を施した触知板を採用しています。



□ 地下道エレベーターの設置

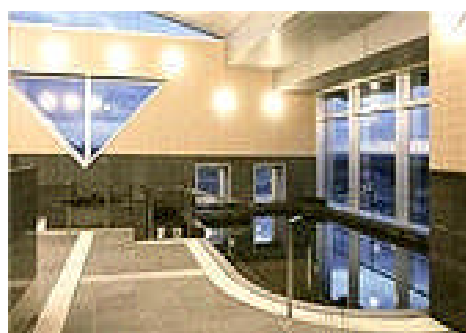
浜松駅前バスターミナルの連絡通路のうち、未整備であった旭・板屋南地下道に、エレベーターを設置します。

■ 宿泊施設ユニバーサルデザイン調査

国際会議の期間中は、国内外から多くの多様な方々が浜松に宿泊されることと思います。こうしたお客様が少しでも快適に安心して滞在されることを願うばかりですが、特に高齢者や障がいのある方、また外国の方にとっては、必ずと言っていいほど気になるのが宿泊施設の設備・情報等の問題です。

こうした不安をできる限り解消するため、現在、市内150のホテル・旅館等に対し、ユニバーサルデザイン対応の調査を実施しています。例えば、スロープ、手すり、車いす使用者客室の整備といった設備と、ホームページによる情報発信、特別メニューの提供や従業員教育など、ハード・ソフト両面にわたる調査です。また、調査には、障がい者等で構成する当事者チームが直接出向き、現地調査や評価を行うことで、提供する情報の検証と的確性を高めるとともに、国際会議の開催を契機としてホテル・旅館業に携わる方々の更なるホスピタリティ意識の高揚を図るねらいもあります。

この調査結果は、来春には取りまとめ、内容を市のホームページに掲載するほか、希望するユーザーや旅行代理店等への情報提供を行いたいと考えております。



■ 市民協働と地元委員会の組織化

去る11月9日に、本市のユニバーサルデザイン施策の審査等を行う附属機関「浜松市ユニバーサルデザイン審議会」を開催し、国際会議の開催に向けた浜松ならではの企画や地元コーナーの運営等について協議を行いました。この中で、市民が気軽に主体的に参加できる仕組み、子供たちを巻き込んだUD研究、思いやり・もてなしの「心のUD」、多文化共生への取組みやボランティアの活用方策など、様々な視点から意見が交わされました。

このような意見を踏まえ、地元開催地として、市民協働（参画）とおもてなしの心で皆様方をお迎えするため、地元コーナーの運営母体となる委員会の組織化を図り、開催まで残り1年を切りましたが、早急に準備を進めてまいりたいと考えております。

■ アフターコンベンション

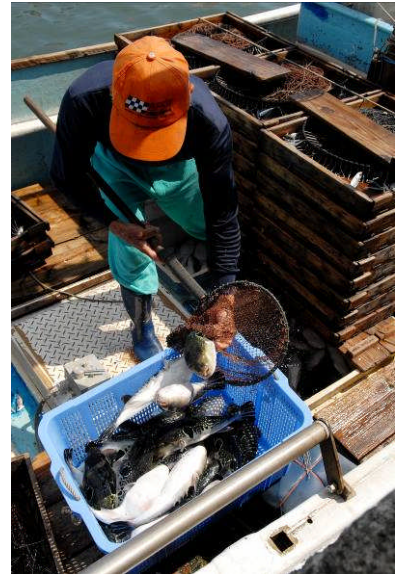
最後に、アフターコンベンションをちょっと紹介します。

浜松の冬の風物詩「はままつ冬の蛍フェスタ」は、60本の街路樹にLEDイルミネーションを飾り付け、街を華やかで幻想的に彩ります。さらに18万球のLEDを装飾した下から見上げることができるシンボルツリーも圧巻です。イベントの後、宵の散策はいかがでしょう。



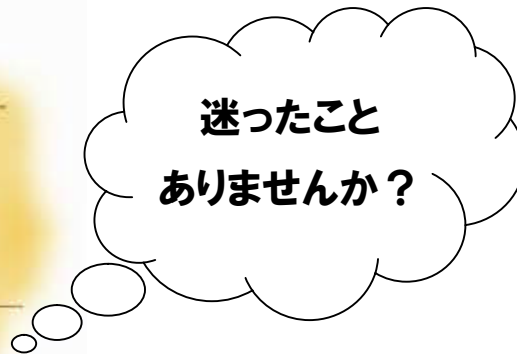
また、浜松のグルメの代表といえば、皆さんよくご存知の「うなぎ」。浜名湖は、うなぎ養殖発祥の地と言われ、100年を越える歴史とともに浜名湖ブランドのうなぎは高く評価されています。また、浜松は、宇都宮と並ぶ餃子王国。ご当地グルメブームにも乗って「浜松餃子」は、いまや全国に知られる名物になり、約80軒の餃子専門店が味を競っています。そのほかに意外と知られていないのが「天然トラフグ」です。浜松の南の遠州灘沖は、日本屈指の漁場となっております。今が旬の味覚、是非ご賞味ください。

そのほか、温泉や景勝地、徳川家ゆかりの史跡など見所や観光スポットがいっぱいあります。どれもゆっくり、じっくり楽しめるのが自慢です。いろいろな「浜松」を体験してください。



Case study: 移動空間プロジェクト

「シームレスな移動空間の実現」に向けた取り組み



移動空間プロジェクトは、「第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2010 in はままつ」に向けて、着実に取り組みを進めています。今回は、その取り組みをご紹介します。

1) 「シームレスな移動空間の実現」の課題と目標を発信

2006年秋の「第2回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2006 in 京都」にて、私たちは、「誰もが行きたいところへ、安全に、快適に移動できること」というシームレスモビリティの考え方に基づきプロジェクトの課題と目標を発信しました。



情報の提供手段や方法が交通事業者間でまちまちとなっていることに着目し、移動の継ぎ目「シーム」における『情報の分断』を課題とし、情報の継ぎ目のない移動環境を目標としました。

2) 2008 年度までの活動

情報の継ぎ目のない移動環境を実現するためには、なによりも街づくりの主体となる事業者等が、一連の移動の中で、『どこに』『どのような』シームがあるかを具体的に気付く必要があります。そこで移動空間プロジェクトでは、交通事業者から自治体などの第三者までが共通で使える「シーム」を発見するためのツール、即ち調査手法の検討を進めてきました。

フィールド調査で使いやすい調査手法とするために、数回の実地調査結果をフィードバックすることで、調査方法、調査シート、データベース化など調査の基本的な骨格を検討してきました。

2-1) 調査方法

調査方法は、既存の国や地方自治体が発信している方法も含めて検討してきました。そして、私たちのオリジナル調査方法として、以下のような考え方で、試行を重ねてきました。



■ 基本コンセプト

- 移動目標を予め設定して行う 「タスク実行型」
- 複数の交通事業者をまたがる 「シームにフォーカス」
- UD マトリックスに基づく 「UD 視点」

■ 具体的な方法

- 「調査シート」を設定する
- 被験者と観察者の2人1組で行う
- 被験者の主観による評価を行う
- 蓄積データで駅同士の比較や問題点の分析を行う

2-2) 調査シート

調査シートとは、横軸に「見つけやすさ」や「分かりやすさ」などの移動情報に関する評価項目を設定し、縦軸に移動行程・調査タスクを設定しています。マトリクス形式の調査用記入用紙のことです。調査の現場では、このシートを用いて、観察者が被験者の評価を記入していきます。

調査シートには、被験者による主観的な評価を得やすさや、どのような事業者や自治体でも使えるような汎用性を持たせる必要があります。

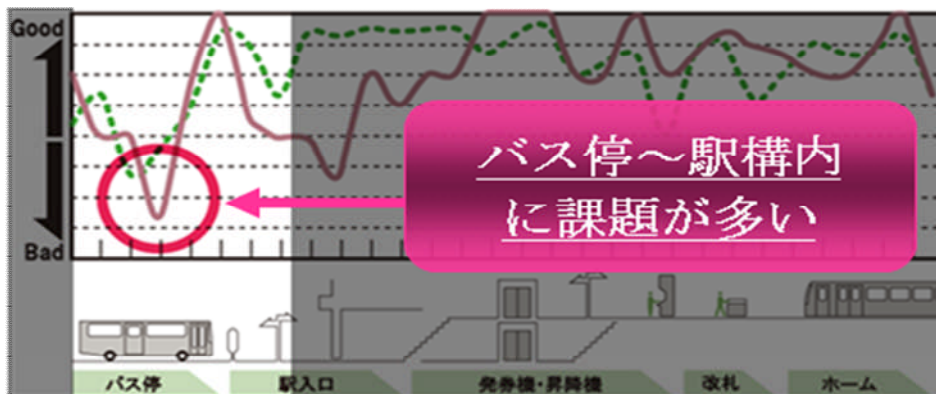
IAUD移動空間プロジェクト調査マトリクス Ver.2008		調査日:	調査場所:	調査者:												
ロケーション	サイン情報	サインの有無	サインの見つけやすさ	サインの分かりやすさ	音声情報文字情報	外国語	設置場所	表示高さ	文字サイズ	それはなぜですか?				その他 (自由記述)		
		有	無	良						一悪	良	一悪	良		一悪	良
バス	バス車内	電光運行状況														
	降りたバス停	駅への案内														
	駅構内	駅への案内														
	エレベーター	エレベーターへの案内														
駅	駅構内	西口への案内														
	電車	バス運行状況														
	ホーム	バス停への案内														
	改札	バス停への案内														
電車	改札	エレベーターへの案内														
	駅構内	バス停への案内														
	エレベーター	エレベーターへの案内														
	駅構内	バス停への案内														
バス	バス	バス運行状況														
	バス停	行先案内														
バス停	バス停サイン	路線図														
	バス停サイン	時刻表														
	バス停サイン	料金表														
	バス運行状況	バス運行状況														
バス運行状況	行先案内															

調査シート ver. 2008

これまで、数回の実地調査で調査シートそのものの使い勝手の第三者評価を行いました。そこで得られたご意見を元に、調査タスクの具体度や、評価項目数や評価段階数、調査エリアの絞込み方などを試行錯誤し、「バスと駅間のシーム部分に対象を絞る」「5段階評価→3段階評価」「評価項目の絞り込み」「項目数の削減」などの改善を施したものが、2008年度に作成した「調査シート ver.2008」です。

2-3) データベース化

調査の結果から、どのようなことが分析できるのか、見通しておく必要もあります。そこで、実地調査の結果をデータベース化し、視覚化してみました。すると、課題がある部分がだんだん明確になってきました。



上図は、都内の2ヶ所の駅周辺を調査した結果を集計したもので、左から右にタスクが並び、タスクごとの評価をグラフ化したものです。最も評価が低い場所は、バスを降りてから駅の構内に入るまでの部分です。つまり、バス停から駅構内までのシームに課題の多いことを、このグラフから読み取ることができます。

課題の多い場所の被験者コメントや写真を見返すと、「デザインの統一性の欠如」や「案内が無い」、「案内の掲示場所が悪い」などの具体的な問題点も洗い出すことができました。

2-4) 2009年度に向けた2つの課題

以上のように、2007年度から2008年度まで、調査手法の基本的な骨格を検討してきました。そして、2009年度に向けては、「自治体・関連事業者の具体的な案件で、調査～改善指針の提案を行うこと」、「調査手法をWeb一般公開で意見収集を行い、さらなる改善を図ること」の2つを課題としました。

3) 2009年度の活動

3-1) 具体的案件 「JR静岡～新静岡駅周辺 移動情報シームレス化研究」

2009年2月の「IAUDユニヴァーサルデザイン大会 in 東海」にて、私たちの成果発表を聞かれた静岡県県民部の方から、新静岡再開発計画の情報提供をいただきました。この地域のサイン計画も含めて、ちょうど良いテーマでした。これがきっかけとなり、静岡県・静岡市・静岡鉄道殿・しずてつジャストライン殿と詳細な情報交換をさせていただき、「JR静岡～新静岡駅周辺移動情報シームレス化研究」というテーマを進めています。その新静岡再開発計画は、2010年10月に本体工事着手、2012年秋に新静岡センター開業の予定です。

また、静岡県や静岡市にヒアリングを行うと、当該地域の「JR静岡～新静岡駅間の案内情報が分かりにくい」との声の一部あることがわかりました。

今年7月のプレ調査で、私たち自身も実際に現地を観察し、当該地域の案内情報の問題点や事

業者間に跨る「シーム」を肌で感じました。

そこで、これまで研究・試行してきた調査手法を用いて、客観的に問題点を浮き彫りにするため、以下のように本調査を実施しました。

本調査の概要

実施日：2009年11月13日（金）

範囲：JR静岡駅北口～新静岡駅の往復

モニター：16名（健常者・色弱者）

調査者：11名

見学者：静岡県殿、静岡市殿の担当者

この調査結果は現在集計中です。調査終了後にモニターさんと調査者、調査者同士、またメンバー間で、振り返りの時間をもちました。そうした中で、概略次のことがあげられます。

調査の振り返り

1. 案内情報が無いことが問題
2. 案内情報はあるが、場所・位置に改善必要
3. 案内情報はあるが、デザインに改善必要
4. それぞれの案内情報は問題ないが、地域で統一されていない



3-2) 調査手法「調査シートの改善と一般 Web 公開」

調査手法は、静岡での試行、フィードバックを繰り返し、より一層の改善に向けて進行しています。

例えば、静岡本調査でも使えるカスタマイズ性と一般 Web 公開に向けた汎用性を両立させることを意識して、「調査シート ver.2008」の応用と改善に取り組みました。

IAUD移動空間プロジェクト調査マトリクス 静岡(行き)

●調査日 年 月 日 ●調査時間 : - : ●調査場所: ●天候:

●選択モード ○A. エレベーター ○B. エスカレーター ○C. 階段 ○D. 自由(エレベーター+エスカレーター+階段)

案内情報種類選択 1.地図 2.案内板 3.降下口 4.貼り紙 5.音声機 6.柱、壁 7.その他

評価項目

コメント

調査対象の案内情報

上図は、静岡本調査で試用した調査マトリクスです。マトリクスの縦軸には、調査のシナリオと、その場面に出てくる具体的な案内情報を記入します。縦軸のひとつひとつが、調査対象になります。横軸は、評価項目です。案内の見つけやすさ、わかりやすさ、外国語表記などの補助案内が、共通の評価項目になります。

例えば、「案内の見つけやすさ」では、地図や誘導サイン、情報表示装置などの案内情報媒体そのものが、見つけやすいかどうか、を評価してもらいます。(下図参照)

まず、設置場所の良し悪し、表示高さの良し悪し、そして総合評価を行います。

IAUD移動空間プロジェクト調査マトリクス 静岡(行き)

●調査日 年 月 日 ●調査時間 : - : ●調査場所: ●天候:

調査シート改善版

案内の見つけやすさ				案内の分かりやすさ				補助案内												
設置場所		表示高さ		総合		文字サイズ		色使い		検索性		総合		外国語		音声情報		点字情報		
良	悪	良	悪	良 ←	→ 悪	良	悪	良	悪	良	悪	良 ←	→ 悪	英	中	韓	無	有	無	

■案内の見つけやすさ

地図や誘導サイン、情報表示装置などの案内情報媒体そのものが、見つけやすいかどうか。

設置場所:良/悪
表示高さ:良/悪
↓
総合評価:良-悪

また、「案内のわかりやすさ」では、案内情報の内容が、見やすく理解しやすいかどうか、を評価してもらいます。（下図参照）
 同じように、文字サイズ、色使い、検索性、総合評価を行います。

IAUD移動空間プロジェクト調査マトリクス 静岡（行き）

調査シート改善版

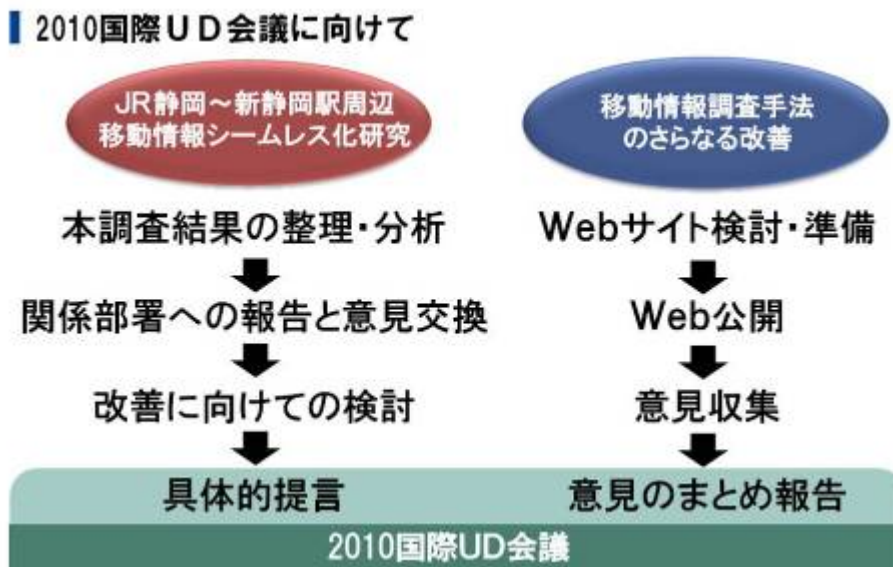
案内の見つけやすさ				案内の分かりやすさ				補助案内														
設置場所		表示高さ		総合		文字サイズ		色使い		検索性		総合		外国語		音声情報		点字情報				
良	悪	良	悪	良←	→悪	良	悪	良	悪	良	悪	良←	→悪	英	中	韓	無	有	無	有	無	

案内の分かりやすさ

案内情報の内容が、見やすく理解しやすいかどうか。

文字サイズ：良/悪
 色使い：良/悪
 検索性：良/悪
 ↓
 総合評価：良←悪

4) 2010 国際 UD 会議 in はままつ に向けて



2010 国際 UD 会議へ向けて、「JR 静岡～新静岡駅周辺 移動情報シームレス化研究」と「移動情報調査手法のさらなる改善」の2つのテーマを継続してブラッシュアップします。

「JR 静岡～新静岡駅周辺 移動情報シームレス化研究」では、調査からいよいよ改善に向けての検討段階に進みます。国際会議での具体的提言に向けて推進します。

「移動情報調査手法のさらなる改善」では、Web 公開とその後の意見をまとめて報告を行います。

5) まとめ

これまでの取り組みから、「多くの交通事業者や関係部署間にまたがる『シーム』の改善では、利用者の立場に立った行動と気づきなくして、具体的な動きに結びついていかない」ことがわかりました。2010年に向けては、関係者との意見交換や Web 公開による意見収集を更に活発にして、具体的な提言をしていきたいと思えます。

私たち移動空間プロジェクトは、これからもよりシームレスな社会の実現に向け、歩み続けていきます。

世界の UD 動向

●「第4回サステナブルデザイン国際会議 2009 Destination 2023」開催予定

昨年12月に開催された第3回国際会議はIAUDも後援し、本誌の今年1月号でもレポートしましたが、第4回目となる今回は開催時期が年明け3月に変更となりました。

この国際会議は第1回目「サステナブルデザインとは?」、第2回目「ゴールはどこに?」、第3回目「どうやったらアクションを起こせるか?」と展開されてきましたが、今回は、基礎となる学習の期間は終わり、「成果をもちよって発表しましょう」ということで、議論/理念よりも活動報告を中心として行動に重点をおくとする開催方針とともに、日程とプログラム草案が公開されましたのでお知らせします。



「サステナブル」は来年の「第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2010 in はままつ」でもキーワードの一つとなっており、連携して議論を深めていくことが期待されます。

開催日：2010年3月13日（土）、14日（日）

会場：桑沢デザイン研究所（東京都渋谷区神南1-4-17）

テーマ：「ソーシャルイノベーションの現在進行形」（仮）

サステナブルな社会をめざしてイノベーションをおこす、「現在進行形」の様々なプロジェクト、アクションの報告を募集し発表してもらい、また、その種をどうそだて、どう、広げてゆくか、仕掛けてゆくかを検討する。

主なプログラム（草案）

基調講演会：3月13日（土）10:00～17:00（予定）

第1部：基調講演「ソーシャル・イノベーションとは何か」[講師未定]

第2部：プレゼンテーション「ソーシャル・イノベーション」[講師未定]

第3部：パネルディスカッション　ファシリテーター：益田文和

活動報告会：3月14日（日）10:00～17:00（予定）

シリアルプレゼンテーション：10組による活動報告、Q&A

30分ずつ、10組みのシリアルプレゼンテーション。

&Aでは前日の講師がアドバイザーとなり公評、アドバイスも行う

海外プレゼンターはビデオ/スカイプでのプレゼンテーションを導入予定

公式サイト：<http://www.sustainabledesign.jp/2023/>

●「ドイツ・ユニバーサルデザイン賞2010」 応募のご案内<最終>

2007年にドイツ・ハノーバー市を本拠地とするユニヴァーサルデザイン協会及びその事業運営企業であるユニヴァーサルデザイン有限会社によって運営が開始された「国際ユニバーサルデザイン賞」は、universal design award 2008 及び universal design award 2009 の2回の実施を経て、今回、第3回目となるものです。応募登録の締切り日は12月22日となっていますが、この度、主催者から最終案内をいただきましたので会員の皆さまにお知らせいたします。

<universal design award 2009>実績概要

世界18カ国・地域から92点、日本からは6社、14点の応募があり、以下のような受賞実績となりました。

- (1) 専門審査員の評価による universal design award 09 単独受賞：
4社の4点が受賞（全体では36点の受賞数）
- (2) 年齢及び性別で区分した100名の投票結果による universal design consumer favorite 09 単独受賞：
1社の2点が受賞（全体では33点の受賞数）
- (3) 両方を同時受賞：
4社の5点が受賞（全体では19点の受賞数）

授賞式は、毎年ドイツ・ハノーバー見本市会場で開催され、4～50万人の来場者がある世界最大のIT見本市CeBIT(セビット)の展示ホールの1つに設置されたデザイン関連の特設展示場において執り行われ、各社の代表者が賞状を受け取るとともに各受賞作品が紹介・展示され、CeBIT開催期間中、多数の来場者からの注目を集めています。

応募要領の重要事項は以下のとおりですが、応募要領の詳細につきましては、universal design GmbH社のWebサイトおよび下記までお問い合わせください。

公式サイト：<http://www.ud-germany.de/>

お問い合わせ先：(ドイツ)ユニバーサルデザイン協会在日代表事務所 代表 山下 幹生
〒606-0866 京都市左京区下鴨東森ヶ前町6番地
Tel: 075-334-8612 Fax: 075-334-8613
E-mail: mikio_yamashita@diary.ocn.ne.jp

“universal design award 2010” 募集要項の要点

1. 応募資格者

プロダクトデザイナー、グラフィックデザイナー、メーカー、サービスプロバイダー及びサービスデザイナー、建築家、インテリアデザイナー

2. 応募カテゴリー

- ・ 居住空間関係、電話機・娯楽機器、レジャー・ライフスタイル関係、移動用機器、労働空間・業務用機器、公共エリア関係、コミュニケーション関係、サービス関係、生活支援を要する人々への製品、建築物、サービス
- ・ 作品は、既に市場で入手できるものを対象とします。試作品については、市販対象製品と同様の機能、操作方法、外観を有する場合は、審査の対象となります。現物が大き過ぎる場合には、模型または細部が分かる写真での応募が可能です。(ご質問のある場合にはお問合せ下さい)

3. 評価基準

可能な限り多くの人々が公平に使用できること・柔軟に使えること・容易に直感的に使えること・誤使用への許容範囲があること・安全性・市場性・革新性・サステナビリティがあること等

4. 応募登録

応募締切日：2009年12月22日（Webサイトより応募手続きを行ってください）

応募作品搬送締切日：2010年1月8日必着（指定業者のところに送付してください）

5. 審査

専門家による審査は、2010年1月20日にミュンヘン工科大学のフリッツ・フレンクラー教授を審査委員長とする審査委員会で審査が行われます。審査結果は、2009年1月29日までに各応募者に通知されます。

年代別・性別で選んだ100名の一般人が選定するuniversal design consumer favourite 2010については、2010年1月22日～24日に審査されます。審査結果は、上記同様、各応募者に1月29日までに通知されます。

6. 授賞式及び展示会

世界最大のIT見本市 CeBIT2010の会場内の1つのホールに設営される特設展示場にて、2010年3月3日午前11時から開催され、受賞作品も同展示場で紹介・展示されます。

7. 応募及び入賞作品に対する料金（1応募作品当たり）

- ・ 応募時：600ユーロ+ドイツ付加価値税（税率19%）
- ・ 受賞時：1,175ユーロ+ドイツ付加価値税（税率19%）

尚、上記の応募で一旦支払った付加価値税は、日本からの応募者に対しては、ドイツの税務当局に所定の手続きを取れば、後日還付されます。また、還付手続きの代行をする業者も国内にあります。

8. 搬送、保険等

応募作品等の搬送にかかる費用はすべて応募者の負担となります。梱包材は、返却時に再利用できるものにしてください。搬送中や保管時の盗難・損傷について、主催者側は一切責任を持ちませんので、必要であれば保険をかけてください。

以上

【UD2010 ウォッチング】

●「第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2010 in はままつ」グローバルサイトもオープン！

10月の日本語サイトに続いて、英語のグローバルサイトがオープンしました。開催趣旨書や開催概要がご覧いただけるほか、論文要約(アブストラクト)の投稿も受け付けています。

第3回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2010 公式サイト

日本語サイト：<http://www.ud2010.net/>

グローバルサイト（英語）：<http://www.ud2010.net/index.en.html>

●実行委員会の動きが活発になってきました。

和英の公式サイトもオープンし、来年秋の開催に向けて実行委員会の動きも活発になってきました。当面は各担当委員による部門別ミーティングを適時開催し、その結果を実行委員会や理事会に報告するかたちで検討が進められています。既に論文募集、広報関連の部門別ミーティングが開催され、今後、企業協賛などの勧誘活動が強化されてゆく予定です。

次回の理事会は年明け1月26日(火)に開催が予定されています。(会場未定)

【編集後記】○ひらがな入力して変換キーを押せば、難しい漢字や忘れていた漢字も表示される。文章を作成するのに苦労しないで済む便利な時代になった。会社での仕事ではパソコンが各人に与えられ、様々な文書や資料が作成される。辞書を片手にエンピツやボールペンを持つ姿はなかなか見られなくなってきた。また携帯電話が小学生にまでも普及し、メール作成画面を辞書代わりに使われていると言う。ディスプレイに表示された候補漢字のなかから該当するものを選べば良いだけである。しかし、言葉本来の意味を知らなければ、間違った漢字を使うことになってしまう。

「たかねのはな」という言葉がある。手の届かない高い峰（嶺）に咲く美しい花のように、遠くからただ憧れて眺めるだけしか出来ず、とても自分のものとして手にすることができないものの例えである。だから「高嶺の花」なのだが、先日読んだ新聞記事では「高根の花」と書かれてあった。高い根っこの花とはいったい何なのだろうか。本来の意味を示しているとは到底思えない。なんでも新聞業界では「高根」と書くのが常態らしく、「嶺」が常用漢字でないために当て字として「根」を使う取り決めだというのである。さすがに「値」は当てなかったようだ。漢字は表意文字だから、当て字が使われてしまうと意味不明の言葉になってしまう。このような意図的な誤用を止めて、常用漢字にあるかないかには関係なく本来の文字を使ってほしいと思う。（矢）

○最近読んだ本によると、人生には「思春期」、「中年期」、「老年期」という3回の大きな心の危機があるそうで、中でも中年期、老年期の心の危機をうまく乗り越えられず、さまざまな不適應や心理的障害を起こす人が最近増えているということです。簡単にいうと、体力の衰えや体調の変化、残された時間、死や老いの不安などに対して、それらをうまく受け入れられず青年期の心のままでいると、歳をとること自体が不幸として心にのしかかってくるため、中年期、老年期のアイデンティティに更新することが重要ということです。解決の手がかりとして同じ本では「ジェネラティヴィティ」というドイツの心理学者による言葉が紹介されており、経験や知識を活かして何かを生み出す《創造性》、会得したものを次の世代に伝える《世代継承性》、人のために何かしてあげようとする優しさ《愛他性》という3つの要素を挙げています。UDでも盛んに「心のUD」ということが言われますが、関連するテーマの研究も増えているようなので今後の成果に期待したいと思います。（葛）

IAUD Newsletter では、誌面を会員の皆さまの UD に関わる情報交換の場と位置づけています。ぜひ、会員企業の UD 商品開発事例や PJ/WG の活動成果事例等の情報をお寄せください。また、国内外の UD 関連イベント、シンポジウム等の開催情報もお知らせください。ご連絡は、news@iaud.net へ直接、メールをお送りいただくか、事務局あるいは情報交流センターまでお問い合わせいただいても結構です。

無断転載禁止

IAUD Newsletter vol.2 No.9
2009年12月1日発行
国際ユニヴァーサルデザイン協議会

事務局 : 225-0003 横浜市青葉区新石川 2-13-18-110
電話: 045-901-8420 FAX: 045-901-8417
e-mail: info@iaud.net
情報交流センター: 104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9
(IAUD サロン) トヨタ八丁堀ビル 4階
電話: 03-5541-5846 FAX: 03-5541-5847
e-mail: salon@iaud.net